

翻訳教室

Lectures on Literary
Translation
from English to Japanese

柴田元幸



朝日文庫

翻譯教室

柴田元幸



	まえがき	6
1	Stuart Dybek スチュアート・ダイベック	
	Hometown	13
2	Barry Yourgrau バリー・ユアグロウ	
	Carp	55
3	Raymond Carver レイモンド・カーヴァー	
	Popular Mechanics	95
4	Haruki Murakami 村上春樹	
	Super-Frog Saves Tokyo	141
	(Translated into English by Jay Rubin)	
	特別講座	
	村上春樹さんを迎えて	181

- 5 Italo Calvino イタロ・カルヴィーノ
Invisible Cities (Le città invisibili) 233
(Translated into English by William Weaver)
- 6 Ernest Hemingway アーネスト・ヘミングウェイ
In Our Time 275
- 7 Lawrence Weschler ローレンス・ウェシュラー
Inhaling the Spore 309
- 8 Richard Brautigan リチャード・ブローティガン
Pacific Radio Fire 331
- 9 Rebecca Brown レベッカ・ブラウン
Heaven 373
- 課題文の著者紹介 402
解説 岸本佐知子 405

この本は、2004年10月から2005年1月にかけて東大文学部で行なった授業「西洋近代語学近代文学演習第1部 翻訳演習」の内容を、ほとんどそのまま文字化したものである。言い違いや矛盾などは修正してあるし、特に教師の発した一連の理不尽・意味不明な発言はある程度理にかなうよう変えてあるが、基本的な流れとしては、実際の授業そのままである。

この本のなかで、ということは実際の授業のなかで、教師と学生たちが、それなりの熱を込めて論じ合っている／いた問題は、翻訳とか言葉の綾とかいった事柄に関心をお持ちでない方々からすれば、大半はどうでもいいことにちがいない。でも、世の中のたいていの人にとってどうでもいいことを熱くなって語りあえるのが大学だ、という見方もあるだろうし、そもそも万人にとって天下の一大事であるような問題など何もない。すべてのことは、誰かにとってはどうでもいいことであり、誰かにとってはどうでもよくないことである。この2004年の授業は、翻訳という問題をどうでもよくないことだと思う人間がなぜかかなりの数集まった、非常に幸運な場であった。それが本になることで、同じように思われる方々に数多く擬似参加していただければとても嬉しい。

授業のやり方は、おおよそ以下のとおりである。まず、あらかじめ課題文が配布され、学生全員がそれを訳して、訳文を提出する。それを、教師と大学院生数名（この学期は3

名) が手分けして添削し、コメントをつけて授業時に返却する。学生は返却された自分の訳文を手元に置きながら、授業に臨むわけである。授業では、オーバーヘッドカメラ、略してOHC、またの名を書画カメラ、またの名を教材提示装置、となかなか名称が定着しないのであるが要するに簡単なテレビカメラを使って、あらかじめ提示用にプリントアウトした学生の訳文を画面に映し、学生と話しあいながら教師がその場で赤を入れていく。終了時に、学生は次回の課題文の訳を提出し……これが一学期間くり返される。ほとんど毎週翻訳を提出することを求められるわけで、学生にとってもけっこうきつい授業である。

1993年から2001年にかけて、教養学部でこの授業をやっていたときは、受講対象者が全学部の学生だったため参加者も100~400人にのぼったので、教師がもっぱら一人で喋って画面の訳文に赤を入れていくかたちで進行したが(200人の前で気軽に発言できる学生はそういない)、2002年以来、文学部でこの授業をやるようになって、受講対象者が基本的に文学部生となったため(まあ他学部からも物好きな人が嗅ぎつけて来てくれてもいるが)、参加者も40~60人程度となり、教師と学生があれこれ話しあいながら授業を進めることが可能になった。なかでも、この2004年の授業は、なぜか話し合いが盛り上がるが多かったのである。名教師だのダメ教師だのというのが、授業を活かすも殺すもまずは学生次第なのだ。

この本をどのようにお読みいただくかは、当たり前だが読者それぞれの自由である。1章から順に読む必要も特にな

毎回授業で活発に発言してくれた学生諸君に感謝する。ゲストで出ていただいたジェイ・ルービンさん、村上春樹さんに感謝する。お二人がおいでくださった回は学生たちの顔が本当に輝いていて、見ていて僕もすごく嬉しかった。毎回の授業を支えてくださる、小野進先生をはじめとする視聴覚教育センターのみなさん、文学部教務課のみなさんに感謝する。会社の方針でお名前は挙げられないが、毎回教室に来てくれて授業を録音し、テープを文字化してくれた担当編集者に感謝する。毎週提出される訳文と一緒に添削してくれた院生の新井景子さん、小澤英実さん、小路恭子さんに感謝する。以前は100本でも200本でも一人で読んだものだが、レポート読みに確保できる時間も少なくなり体力も減退し脳のrpmも落ちたいま、院生TA（ティーチング・アシスタント）はなくてはならない存在である。また小澤さんはこの本を原稿段階で通読し無数の建設的提言をしてもくれた。小澤さんのおかげで、全体の明瞭度は20%向上した。あわせて感謝する。

この年はスケジュール上できなかったが、授業を終えたあとに、TAと昼ご飯を食べながら「反省会」をやるのはいつもすごく楽しみである。そうした反省会でTAたちからもらったアドバイスのおかげで、授業もずいぶん改善された。この本は、93年以来この授業を手伝ってくれたすべてのTAに、とりわけ、課題文探しから学生一人ひとりのケアまで実に多くの面で何年も授業を支えてくれた前山佳朱彦君に捧げる。



東大文学部人気講義を載録。9
つの英語作品をどう訳すか、著
者は単語一つまで学生と討論し、
講義を進める。翻訳という知的
作業の追体験から出会う、英語
と日本語の特性や違い、文体の
意味、小説の魅力とは。ゲスト
に村上春樹氏、J・ルービン氏
も登場。 〈解説・岸本佐知子〉



9784022646644



1920198010003

ISBN978-4-02-264664-4 C0198 ¥1000E

朝日新聞出版

定価： 本体1000円 + 税

TRƯỜNG ĐẠI HỌC CÔNG NGHIỆP
TRUNG TÂM THÔNG TIN THƯ VIỆN



Mã sách: 080703612